

日展ニュース

No. 185

<https://www.nitten.or.jp/>

令和5年9月30日発行

編集兼发行人 神戸峰男

第10回日展に向けて



黒川能 森田 茂



「第十回日展を開催するにあたつて」

日展理事長 宮田亮平



この度、第十回の大きな節目を迎えることはこの上なき喜びであります。世界的なコロナ蔓延も、その位置付けは五類となりました。皆が触れ合えるイベント等が出来ず、展覧会のみの開催を余儀なくされていたことからの解放感は計り知れものであります。この時にこそ文化の力、藝術の力、美術の力をもつて世にときめきを発信する大きな役割がこの日展にあるのではないでしょうか。

これは百十五年の長きにわたり途切れる

ことの無い日展の行動力により、むしろ人々の生きる力を共通・共有させていただくことかと思います。

日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五科全てにおいて、渾身の作品を発表するチャンスと、各作家が使命感を持つて制作いたしております。必ずやご期待に添える会場になると信じております。

どうぞ皆様の温かいご理解とご支援を賜りますよう心よりお願ひ申し上げます。

第十回日本美術展覧会実施内容

第十回日展 講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ
・映像による作品解説等を本年度も左記の日程で開催いたします。

会期 令和5年11月3日（金・祝）～令和5年11月26日（日）
午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで。）

観覧時間 休館日 毎週火曜日
入場料 一般 ○当日券
（税込） 一、四〇〇円
一、二〇〇円

○団体券（予約制）・前売券 一般 一、四〇〇円
※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。

小・中学生は無料。

高校・大学生は第十回記念として無料。
(入口で学生証のご提示をいただきます。)

会場 国立新美術館 東京都港区六本木七一二二一一



「触れる鑑賞」プロジェクト
日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品（彫刻一部の作品）に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。

開催日	講堂でのイベント
11月4日(土)	午後1時30分～3時30分（日本画）※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度審賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選） 今年度新入選者
11月10日(金)	午後1時30分～3時30分（彫刻）※途中10分休憩 「ぶらっと彫刻を楽しむ」 今年度審査員と新入選者による座談会 登壇審査員が選定した作品を解説 今年度審査員
11月11日(土)	午後1時00分～2時30分（洋画） 今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月18日(土)	午後2時00分～3時30分 特別対談 デザイナー コシノジュンコ氏×宮田亮平理事長
11月23日(木・祝)	午後1時30分～3時30分（工芸美術）※途中10分休憩 シンポジウム「伝承と発信」 今年度審査員
11月25日(土)	午後1時30分～3時30分（書）※途中10分休憩 シンポジウムによる討論会「日展の書」 森嶋隆鳳・木村通子・綿引滔天・大橋洋之・川合玄鳳 映像による作品解説「書」 松清秀仙・倉橋寄艸・岡野楠亭

第十回日展 審査員・係

第一科（洋画）審査員

一九名

(外部審査員)		筑波大学名誉教授		常磐大学特任教授		多摩美術大学客員教授		美術評論家		(第三科彫刻審査員)	
(準会員)		能島征二	山本真輔	齊藤泰嘉							
牧田元田	堀内清家	竹谷中辻	邦夫伸	堤直美	武田厚						
法子	木山有子	石田陽介	野間口	江藤泉							
安田	野添悟	佳則	櫻井	真理							
陽子	浩一	中村	中村	望							
	優子			泉							

第三科 彫刻審査員
一九名

(準会員)	(会員)
堀河	小瀬
本阿部	高梨
佐藤	西田
浅見	松田
研昭政	伸一
一良広	芳実
浩祐治	湯山
本池上	竹久
田わかな	西房
年中島	青島紀
男健太	三雄
	浩二
	秀樹
	俊久
	満章

第四科（工芸美術）審査員 一九名

(外部審査員)

外部審査員

画

(準会員)	(理 員)	井 隼	慶 人	三 田 村 有 純	岡 部	友 子
武 田	(会 員)	大 橋	年 雄	高 橋 貞 夫	佐 藤	道 信
吉 水	橋 本	石 川	充 宏	春 日 井 路 子	志 観 寺 範 從	
絹 代	上 森	志 觀 寺 範 從	高 津 明 美	横 山 喜 八 郎	福 富	
古 瀬	四 郎	橋 本 升 三	高 津 明 美	香 君	信	
政 弘	伯 耆	林	吉 水	吉 水	前 東 京 庭 園 美 術 館 副 館 長	東 京 藝 術 大 学 教 授
正 二	正 一	香 君	吉 水	吉 水	佐 藤	道 信

第五科
（書）審查員

第五科（書）審査員	一九名
（外部審査員）	
元セントチャーチュニア・シアム館長	充晴
大阪市立美術館主任学芸員	神崎
（副理事長）	弓野
（理事）	隆之
（会員）	巍堂
黒田 賢一	吉澤 真神
高木 聖雨	伊藤 通子
伊藤 隆鳳	森嶋 繼引
吉澤 刘石	池田 稲村
仙游 吉澤	大橋 川合
鈴木 稲谷	藤川 宮負
藤川 翠香	宮負 丁香
（準会員）	玄鳳 素軒

第十回 日展《係

卷之三

第一科	由里本出	◎岸野圭作	中村徳
能島浜江	稻田重紀子	松崎十朗	石原准
川田恭子	片山侑胤	中村文子	川嶋涉
丸山勉	南聰	藤島博文	
高梨芳実	竹久秀樹	青田賢藏	
西房浩二	松田茂		
浅見文紀	小川満章	◎西田伸一	中島紀三雄
阿部良広	池上わかな	佐藤祐治	河本昭政
中島健太		本田年里	
堀研一			

第四科	(工芸美術)
大桶年雄	高橋貞夫
春日井路子	志観寺範従
橋本昇三	横山喜八郎
林 香君	古瀬政弘
吉水絹代	武田 司
第五科	(書)
真神巍堂	伊藤仙游
森嶋隆鳳	吉澤鐵之
綿引滔天	池田毓仁
大橋洋之	稻村龍谷
長井素軒	吉澤劉石
藤川翠香	鈴木赫鳳
宮負丁季	福富 信

瀬戸内海の陽日に日展を思う

金田 晉

第二次世界大戦は一九四五年八月に終わつた。だがその年度内から日展の歴史は始まる。四六年三月第一回展が開催された。これはミラクルであった。大戦中文展系洋画界の総帥であつた南薰造（一八八三—一九五〇）も東京美術学校油画科教授職を辞して敗戦前年に故郷広島県安浦町に帰つていたが、日展の出発のために命削つてまで力を尽くした。

安浦町を通り、呉線の車窓から見える風景は美しい。一九世紀江戸時代長崎に住んだオランダの軍医シーボルトは江戸参府時の旅日記を残しているが、途上塩飽諸島へ向かう数日の船旅を「もつとも楽しみ多き日々」と回想し、瀬戸内の多島美を絶賛した。明治以降は鉄道沿線からの眺望となつたが、絶景たることは変わらなかつた。

南の陽光への感性の鋭敏さは生地の風土に由来するものだつたろう。イギリスで水彩画の光を学び、つづいてフランス・パリで印象派の光を学んで、日本洋画界の雄となつた。その地位をあえて犠牲にして帰郷したのは、当時の東京での生活上の困難避難とは別に、自分の絵画のぎりぎりのところから生き直そうとする決意があつたはずである。だがそのかれを待つていたのは軍事機密漏洩防止が理由の瀬戸内海描画の禁止であつた。そもそも呉線列車の海側の窓は乗客が外を見ないように遮蔽されていました。戦後その禁が解かれた。南には潮騒の音が耳に残る光と風と波の風景を思いのたけ描けるこ

とがどれほど嬉しかつたか。禁令から解放された瀬戸内海には懐かしい印象派の陽射しが溢れていた。朝早くから海や島に写生に出かけたといふ。陽光を浴びて生活する家族の日常性がまた。ばゆかつた。写生会（中国新聞社主催）を幾度も企画し、市民たちを海や島のスケッチ旅行に連れ出した。帰郷の際持ち帰つて来た画材を焼け出された市民たちに惜しげもなく分け与えた。南は日展の第一回（四六年）、第四回（四八年）に審査員を務めたが、その第四回展については翌四九年三月広島巡回展を実現した。日本展への広島からの一般応募数は県別で当時全国五指に入つていたという。五〇年一月南逝去。東京美術学校で南に師事し、帰郷後の南の美術活動を支えつけた新延輝雄（一九二二—一二〇一二）はその遺志をついで戦後の広島美術の再興に尽くした。わたしはかれから「絵の心」をよく聞き、広島の風土と歴史を絵描きの魂をよく聞き、広島の風土と歴史を学んだ。既に老境であり、追憶のやわらかい陽射しの中の街角と老人を描いていたが、恩師讓りの品格あるその描法に崩れるところがなかつた。画面に揺らぐ淡い光は瀬戸内海の光に通じていた。

大正から昭和初期にかけて広島の市民たちは、建物や店構えといい結髪や着付けといい茶菓飲食といい、洋風モダニズムの漂う都市生活に馴染んでいた。美術に親しむ気風があつた。瀬戸内海安浦の沖合に下蒲刈島が浮かぶ。江戸時代には朝鮮通信使節団の寄港地で、広島浅野藩のいわば海の迎賓館であった。平成の初め当時の町長竹内弘之は全島庭園化をとなえ、この島に能登や瀬戸内各地から何軒もの古民家・茶室を移築し資料館や陶芸館等を開設した。所蔵品数約二千三百点。個人宅の応接間や座敷に掛けられるスケールの洋画、日本画、版画、染色の秀作を集め、日本近代美術史をたどる。

それることを特色とする。寺内萬治郎の常設示館も併設されている。わたしも当初から作品にあわせて高名な作家、評論家の方々に全国からご来島いただき、絵の前で作品の来歴、内容等の解説を受けた。日展系の先生方からも心配りのきいた懇切な解説を受け、そのあと海の見える広い座敷で親しく歓談させていただいた。それがたのしみであった。

瀬戸内海の陽日は日展によく似合う。

金田 晉（かなた すすむ）



一九三八年大阪府生まれ。

東京大学文学部美学美術史

学科卒業。同大学院美学専

攻博士課程単位取得退学。

博士（文学、東京大学）。

広島大学講師、同総合科学

部助教授、教授を経て、東

亞大学総合人間・文化学部

博士（文学、東京大学）。

広島大学講師、同総合科学

部助教授、教授を経て、東

日展とA-I技術

鈴木達也

私が初めて上野の美術展に行つたのは一九五一年、中学生になつたばかりの頃だつた。当時の上野駅は東北地方への玄関口であり、東北地方からの列車の終着駅でもあつた。頭に手ぬぐいを被り、大きな荷物を背負つたモンペ姿の小母さん達が東北地方から行商に来ていたし、修学旅行の生徒たちは初めての東京を好奇心満々で見つめていた。

広い公園を歩き美術館に近づくと木の合間に第七回日本美術展覧会と書かれた看板が目に入った。文展、帝展を経て戦後は日展となり六年経つた頃で、父が叔父の絵を見に行こうとい

うのでついて行つた。叔父・鈴木満は画家で戦時中は多くの戦争画を描いていた、当時は国の統制で絵画も音楽も自由な表現が許されず、子供心に叔父の絵は暗い軍人たちの絵ばかりと思っていた。戦後しばらく、叔父は我が家に住んでいたこともあり、完成した絵や制作中の絵を覗いたが、「青年士官」(一九四二年、第五回新文展入選)、「武人古老」(一九四三年、第六回新文展特選)、「学徒出陣」(一九四四年、陸軍美術展、情報局賞)など戦争に関係した絵が多く、暗い印象があつた。

乗る気もしないまま美術館に入った。ところが展示された絵は「裸婦」という題で、新居のアトリエで描いたものだった。叔父はこういう絵を描きたかったのだろう。

鈴木 満《裸婦》(昭和26年)

うと子供心に納得した。その後も日展に出展した絵は写実的な人物画で明るい絵が多くた。叔父は典型的な古いタイプの画家で、自分の目と筆と感覚だけを頼りに描いていた。例えは四〇〇号「学徒出陣」を油彩で仕上げるのに、多くの大学を訪ね、制帽や帽章などまで細かくスケッチし、学生を何日もモデルにしてデッサンを重ねている。構図を決める下絵は水彩で、手前の飛行兵の自画像には日本刀を持たせたり試行錯誤を重ねた末、最終的には卒業証書に替えている。この叔父や叔母（青木純子、示現会創立会員、女流画家協会委員）などは、絵を描くのに写真すら頼らず、ましてやコンピューターなどない時代なので、徹底的に自分の目と感覚を頼りに絵を描き続けていた。当時の多くの画家も同じだったと思う。

コンピューターが音楽の世界にも侵入し、音楽制作そのものにコンピューターが使われるようになつた。またCG技術も進歩し、映画やテレビの多くの場面で使われ、利便性と経済的効率面から新技術に依存する人が多くなる中、旧来派はだんだんと少数派になつてきた。美術の世界でも同様と思う。

最近のデジタル技術、とりわけAI技術は、生成AIの出現で人間が創造する音楽や美術の世界に遠慮なく入り込んできた。しかも生成AI技術は恐ろしいスピードで高度なものが現れている。アメリカでは生成AIに関する倫理議論されていると聞くし、法規制の動きや大統領令発令の動きすらある。



鈴木 達也（すずき たつや）

一九三八年東京都生まれ。

日展でも議論されているかと思う。我々は未知のものには恐怖を覚えがちだが、音楽や美術の面でも今後はうまく活用し、共存することを考えないといけない。従来の価値観では判断できない問題である。

第十回日展 各科審査員より

日展制作にあたつて

由里本出（第一科 会員・審査員）



京都育ちの私は、祇園祭の『コンチキチン』と、祇園囃子が街に聞こえてくると日展制作の準備にかかります。今年は、どのように描こうか？あれやこれやと考えることが、作品創りの楽しみもあり、また、苦しみでもあるように思います。毎年、夏の暑い時期から本格的に描き始め、奮闘・努力を重ね、金木犀の咲き薫る頃が近づくと作品の終わりが見えてきます。最終的には、恐れずに新しい自分（作品）を創っていくことが大切であろうと思つております。

今年の審査に当たりましては、創意・工夫の見られる経験豊富な作品、うんうんと唸つている若い人の息遣いが聞こえて来るような力作を期待致しております。

描くということ

稲田亜紀子（第一科 会員・審査員）

この夏、久しぶりに各地のお祭りや花火大会が賑わう様子に、あらためて日本の風土の豊かさを実感しました。

これまで私の日展作品を振り返ると、主な制作時期となつた季節の記憶が紐づいています。夕立の音、土の匂い、短い夏を謳歌する蛙や虫たちの声は時に苦しい制作に新鮮な風を運んでくれました。若い頃はなぜ描くのかなど考えもせず、身体で引く線が次第に形を成していく様子を、知らない自分を見るようで無心になつたものです。近頃は描くことそのものが、連綿と続く多様な生命と繋がつており、それがたまたま作品として結実したりしなかつたりする波の様なものではないかと思うようになりました。

おそらく多かれ少なかれ、誰にとつてもそうしたかけがえのない時間や記憶の集積である一枚の「絵」を、私が審査をするなどおこがましいことですが、作者の息遣いや心の機微を感じ取ることができるよう、真摯に作品と向き合い、心を込めて臨みたいと思います。

新審査員として

青田賢藏（第一科 準会員・審査員）

この度、初めての審査員を拝命し、喜びとともにその重責をいまひしひしと感じています。

今までの審査を受ける側から審査をする側になる戸惑いのなか、作者の感動、情熱を受け止め、慎重かつ謙虚な気持ちで審査に臨みたいと思います。



私は魚の群れを好んで描いてきました。鰯、太刀魚、鮭…。大分県別府の大分マリーンパレス水族館で、鰯の群れを見た時の感動は忘れられません。キラキラと光りながら、大きな固まりとなり、一体となり、向きを変え、リズミカルに光の中を泳ぐ小さな鰯の大きな群れ、また鮭も面白く、北海道の千歳川へ何度も足を運びました。川岸にサケのふるさと千歳水族館があり、千歳川を遡上してくる鮭の群れをガラス越しに見ることができるのでした。鮭のエネルギーと自然の不思議を感じながらの写生は楽しい時間でした。

これからも自然や周りの事象の不思議、美しさから受ける感動を制作の目標にしていけたらと思いを新たにしています。

絵描きとしての連帶

高梨芳実（第二科 会員・審査員）



こここのところクロッキーに精を出しています。年間一〇〇〇ポーズを目標にしますので、結構な労力と時間です。描けば描くほど余計なものは削ぎ落とされ、デッサンは一般教養であり、クロッキーはその體であると思うようになりました。つまり、単に線による置き換えの度合いが高いために絵画的に見えるだけではないでしょうか。なんとか言語化を進めるためにも、続けてゆきたいと思っています。

今、絵を描く若者が激減している状況です。AIの時代だからではなく、専門家のエネルギーを絵画を掘り下げるより、素人に対するメッセージに向けたために、知的な好奇心がこの分野に欠けて見えるのではないかと思います。

日展審査が始まります。全国から集まる審査員達と、肅々と審査を進めながら、横の連帯を深める場でもあると考えております。

初入選の頃

竹久秀樹（第二科 会員・審査員）



昭和四五年、日展に初入選しました。当時私は、笹岡了一先生の画塾で人物デッサンの指導をうけていました。画塾には篠崎輝夫先生はじめ、多くの先輩がいらっしゃって裸婦スケッチ等を無我夢中で勉強していました。そういつた環境の中で、自然に日展に出品を考えるようになります。アトリエが無かつた私は、卒業した学校の部屋を使用させて頂き制作を始めました。前年の日展は観覧していたものの自分がどの程度のレベルなのかも分からずの出品でした。私は「自然から学ぶ」を信条として制作してきました。この学びには終わりはありません。これからも、対象と真摯に向かい、自問自答を繰り返していきたいと思います。

今回の審査にあたりましては、体調を万全に整え、心に響く作品を選考したいと思います。出品者の皆様には、持てる力を出し切り、一杯の制作を期待しております。

当時上野の美術館は旧美術館で階段を上がるエンタシスの柱が並び素敵な面持ちでした。若かつた私は入選の嬉しさで顔を紅潮させてその階段を踏みしめた記憶があります。

この度、第十回日展審査員委嘱の知らせを受け大変緊張しております。今回多くの出品者の方々は、それぞれの想いを抱いて出品なさることと考えます。大変な重責だと思います。精神の高い良い作品が選ばれる鑑査を誠心誠意務めたいと念じております。

第十一回日展審査にあたつて

河本昭政（第二科 準会員・審査員）



今日も汗を

石田陽介（第三科 会員・審査員）



記録的猛暑、記録的降水量、近年は異常気象が常とはなっているが、今年の夏の暑さは特別身体にこたえる。私の住む金沢もフェーン現象に伴い連日猛暑と熱帯夜が続いて、まるで体力を一枚また一枚と削ぎ落としていくようだ。彫刻制作は体力が資本のようなものなので、さすがにきつい。チエーンソー作業では汗が吹き出る。

この度、三度目の審査員を拝命した。「審査するとは審査されること。多くの先輩方から異口同音に語られる言葉だ。公募団体展に身を置くと、ともすれば制作がルーティンとなりかねないが、この言葉に触れるたび、身が引き締まる。

「審査する日を自分は持つていいのか。審査をするに値する作品を作れているのか。」自問自答は続くが：答えはない。

兎にも角にも全身全霊をかけ作品に向かうしかない。審査を受けられる方に礼を失せぬよう、その日を思い今日も汗を流す。さてその成果は如何に。審査される日は刻々と近づく。

心澄まして

中村優子（第三科 会員・審査員）



彫刻の魅力に惹かれ制作を始めてから十五年が過ぎた頃、ワニピースを着た夏休み中の娘がアトリエの中で遊んでいた。それまで裸婦像を中心制作していたが、娘の動きに合わせて動く布の動きや、その下に在る人体の量と動きの変化が面白いと感じ、衣服を纏った彫刻を制作するようになった。ポーズを取りたびに変化する布の動きに目をとらわれすぎて人体の持つ存在感が失われぬよう、服から伸びるしなやかな手足の動きがつながるように、しなやかな体にしなやかな心が宿るよう、毎年悪戦苦闘している。

審査にあたり、今制作されている皆さんの様々な変遷や、作品に込めた強い思いは十分に知りえないので、一つ一つの作品を通じ、語りかけてくれる作者の思いを、心澄まして、受け止めたいと思う。

清新な空気を感じて

野添浩一（第三科 準会員・審査員）



去る七月二十九日から七日間、鹿児島では「第四十七回全国高等学校総合文化祭」が行われ、全国各地から芸術や文化活動に力を入れている高校生たちが集結。拠点となつた鹿児島市の美術館には高校生の瑞々しい感性の作品がならび、公民館等には洗練とした演奏・歌声が響き渡りました。公民館ホールで限られた時間の中で最終のリハーサル・打合せを行う高校生たちのまさに清新な雰囲気に感銘を受けました。

この度、第十回日展におきまして審査の機会を得て、大変光榮です。審査に際しましては、一点一点の作品と丁寧に向き合い、すばらしい力作から清新な空気を感じたいと心から楽しみにしております。その感動を「明日へのエネルギー」にしてまいりたいと存じます。

この大役に恥じないよう、恩師の教えを礎に、お導きいただきました諸先輩方のご厚情に報い、清廉な審査ができるよう一層の精進を重ねてまいります。

師は樹なり

高橋貞夫（第四科 会員・審査員）

第十回日展審査にあたつて —思うこと—

吉水絹代（第四科 会員・審査員）

日展審査にあたり

福富信（第四科 準会員・審査員）



日本農民美術研究所の創設者である洋画家山本鼎先生の言葉に「自分が直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならぬ」との名言があります。

私は農民美術の発祥の地上田市で木彫刻を学び、反り曲がり裂け、反く力はいるが細かい細工のできる樹木の魅力を引き出すための格闘を通して工芸美術の道を歩みました。故郷は屏風のように立つ北アルプスの懷にあり、凛と立つ岳は雄大で堂々たる勇姿に心搖すられたものです。

何度もいるが細かい細工のできる樹木の魅力を引き出すための格闘を通して工芸美術の道を歩みました。故郷は屏風のように立つ北アルプスの懷にあり、凛と立つ岳は雄大で堂々たる勇姿に心搖すられたものです。

私は農民美術の発祥の地上田市で木彫刻を学び、反り曲がり裂け、反く力はいるが細かい細工のできる樹木の魅力を引き出すための格闘を通して工芸美術の道を歩みました。故郷は屏風のように立つ北アルプスの懷にあり、凛と立つ岳は雄大で堂々たる勇姿に心搖すられたものです。



自分の手で創作する手段を探していた二十歳の頃、織に目を向けさせてくださったのは型染の西嶋武司先生でした。私はその素材と技法に興味が湧き、織の作品を創つていこうと決めました。何時もスケッチをされている先生の姿を思い出します。「スケッチはただ描くのではなく、その対象物に向き合つて会話をすることが大切」と言わされていました。私のモチーフは自然が多いのですが、それは偉大で直ぐには対話になりません。その中に身を置き時間をかけて対話をすると色々考えさせられます。大きな懐しさが多くのこと教えてくれます。大きな懐の自然に背中を押されて創作を続けています。

今、戦争や地震、降雨量などによる災害や病など人々が苦しむ厳しい時代です。

各地で苦しむ人たちが多い中で、創作に関わる私たちに出来ることは作品を通して人々に寄り添うことではないかと思います。各々の作家が創られた感性豊かな作品が、日展の空間に集う人々と共に対話ができる素晴らしい会場になるよう願っています。

この度、第十回日展の審査員を拝命し、新たな緊張感と共にその責任の重さに身の引き締まる思いです。

陶芸制作を始めて四半世紀が過ぎました。その間に作品及びその時々の心の動き（或いは足搔き）がありました。不思議なことに今回審査をする立場になることにより見えてくるものがあるのだと、感じられました。自分自身を含め全体を俯瞰していたつもりでも、一義的に発信する作り手であつたが故に見えなくなついたものがあつたのだと。

日展の工芸美術を見ますと、その多種多様な作品、そしてそれぞれの素材と技法があり、自分の専門以外の分野を同列で判断しなければなりません。初めての審査でもありその難しさは想像に難くありません。出品された方々のそれぞれの想い、個性が造形へと十分に昇華された、心に響く作品を受け止められるよう努めて参ります。



公正な審美眼

森嶋隆鳳（第五科 会員・審査員）



この度、三回目の審査員拝命の通知を受け、大変感激するに同時に身の引き締まる思いで一杯です。思い返せば、書が好きで大学でも書道を専攻し学びました。各地から集まつた仲間と切磋琢磨しながら、いつかは日展に挑戦しようと頑張り、幸いにも四回生の時に仲間三人と初入選を果たす事が出来ました。その感激は今も忘れる事はありません。その後は高校教員として勤務しながらの日展挑戦でした。入落を繰り返しながら特選を連続受賞させて頂き、審査員の道へと導いていただいた事に感謝しながら、自分の作品と向き合っている毎日です。

各出品者が一年間、構想を練り上げ、精魂込めて修練を重ね、ようやく仕上げた作品を出品するのが日展であり、最高の発表の場であります。それぞれの想いの込められた力作に対し、一点一点に真摯に向き合い、公平で公正な審美眼で鑑審査に臨みたいと思います。

線の生命力と存在感

大橋洋之（第五科 準会員・審査員）



この度、改組以来の節目となる第十回日展審査員の大役を拝命し、光栄であると同時にその重責をひしひしと感じています。日展は初出品以来の憧れであり書人の戦いの聖地であります。また、最高水準の書作品が出品され、作家一人一人が自らの命を削り、自己を投影した作品の集まる場であります。師は常々、「書は線の生命力と存在感が大切である」と説いています。私はこの線の力の追求を書作の第一と捉え、日々研鑽を続けています。審査にあたっては、諸先輩方に学びながら、虚心坦懐、先入観を持たず、多様な表現に広く平らな心を持って臨んで参りたいと思っております。長きに亘ったコロナ禍も、予断は許さぬものの、人々の動きも、停滞していた文化活動も活動になつてきました。身を縮めた三年を経て、今こそ大きく伸び上がり、書を通して皆様と共に書の持つ力、そして素晴らしい書を発信して参りたいと存じます。

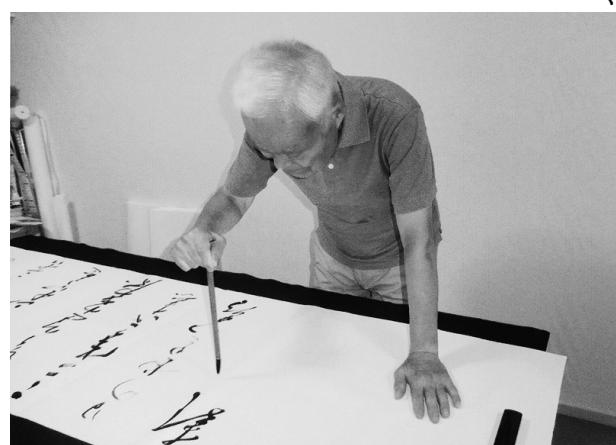
二十歳の時から、日展に出品し始め、結果に一喜一憂しながら、書作に励んで参りました。落選した時も、入選者の作品を見に行くことにより自身の作品の問題点を掘り下げ、反省点を見つけることにより、来年は、ここに陳列されるよう決意を新たにしたものでした。

そして、審査から解放され、ほつとすると、同時に、また別の責任感が芽生え、大きなプレッシャーとなっていました。

出品者個々が一年以上精魂込めた作品を、鑑審査する立場となつた今、色々な作品に対して丁寧な審査を心掛け、悔いの残らないように、先輩方から多くを学び、真摯な姿勢で向き合つていきたいと思っています。

真摯な姿勢で

長井素軒（第五科 準会員・審査員）



♪夏休み一日ART体験♪

第18回
One day Art ワンデイアート

連日の猛暑の中、日展会館のイ
ベントスペースで、「第18回
One day Art」が開催さ
れました。

昨年は感染者数の急増に伴い、
延期を余儀なくされました。ようやく通常開催が叶い、大人と子
供、あわせて173名の方が参加
してくださいました。4年ぶりの
作品展も開催することができ、ス
ポットライトを受けて陳列されて
いる自分の作品に、驚きと喜びの
参加者の表情が印象的でした。

7月22日 彫刻

吉岡 徹 寺山三佳 堀内有子

鈴木紹陶武 安田陽子
(オブザーバー) 山田朝彦

(サポート) 小橋暁子 宮地淑江
(ボランティア) 音羽久美子

7月29日 工芸美術(染)

早瀬郁恵 安藤タツ子 上原利丸
石原真理 平林芳子 中村美紀
林 香君



7月30日 日本画

亀山祐介 川田恭子 能島浜江
岩田壯平

(オブザーバー) 米谷清和
(サポート) 野田夕希 安田敦夫
櫻井伸浩

8月4日 書

井上清雅 編引滔天 植松龍祥
岩井秀樹
(オブザーバー) 高木聖雨

(サポート) 尾花太虛 齊藤貞澄
角田大壌 滑田耀齋 松浦龍坡

伊能柳華 我妻黄華

田辺知治 桑原富一 佐藤祐治
星川登美子 田中里奈

(オブザーバー) 佐藤 哲

8月5日 洋画

高木寛史 澤井和行
田頭益美 佐川かおる
竹尾明子 田中宏欣
土屋礼央 中室里恵
西村潤帰 野田裕一
藤本真之 田中宏欣
宮島幸男 森嶽順子
吉見次郎

株式会社栄豊斎、株式会社吉祥、株
式会社玉蘭堂、株式会社呉竹、株
式会社ケーワース、株式会社光雲堂、株
式会社東海丸二陶芸、株式会社平助
筆復古堂 株式会社墨運堂

ご協力いただきました

株式会社栄豊斎、株式会社吉祥、株
式会社玉蘭堂、株式会社呉竹、株
式会社ケーワース、株式会社光雲堂、株
式会社東海丸二陶芸、株式会社平助
筆復古堂 株式会社墨運堂

賛助会員制度 《日展パートナーズ》
(掲載希望者のみ 令和5年8月末現在)

●個人

亀山祐介 (オブザーバー)
岩田壯平 (サポート)
能島浜江 (オブザーバー)
米谷清和 (サポート)
安田敦夫 (オブザーバー)
松浦龍坡 (サポート)
高木聖雨 (オブザーバー)
滑田耀齋 (サポート)
齊藤貞澄 (オブザーバー)
星川登美子 (サポート)
田中里奈 (オブザーバー)
佐藤 哲 (オブザーバー)

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
飯田真未様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
奥田節子様
梶山純子様
菊池和久様
吳 祐輔様
児玉安司様
坂本美賀子様
佐藤大悟様
瀬川清楓様
田頭明子様
高橋千笑様
竹本葉子様
土橋正彦様
寺岡宏高様
福井素鳳堂様
有限会社 丸栄堂様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
菱三印刷 株式会社
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様

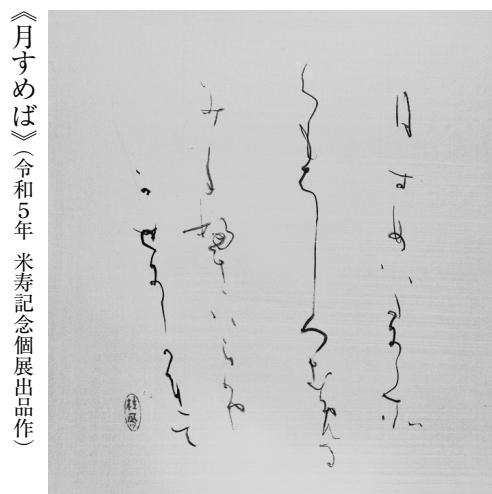
株式会社 IDホールディングス様
飯田真未様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
奥田節子様
梶山純子様
菊池和久様
吳 祐輔様
児玉安司様
坂本美賀子様
佐藤大悟様
瀬川清楓様
田頭明子様
高橋千笑様
竹本葉子様
土橋正彦様
寺岡宏高様
福井素鳳堂様
有限会社 丸栄堂様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
菱三印刷 株式会社
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様

作家人生——私の仕事——

迷路を楽しむ

第五科書会員 池田桂鳳

《ふゆごもり》(平成16年 第36回日展出品作) 文部科学大臣賞



《月すめば》(平成5年 米寿記念個展出品作)



《海》(令和5年 米寿記念個展出品作)



七歳の時、近所の人々に誘われて行つた書塾の先生が日比野五鳳先生でした。それが縁で知らず識らずの内に書の道に足を踏み入れていきました。中学生の時初めて展覧会に出品、それが伊都内親王頤文の臨書で初めて触れた古筆でした。その後、王羲之、懷素、空海、藤原佐理等の漢字指導が中心で、仮名を手掛けたのは大学生になつてからで最初に受けた指導が伝藤原行成筆の針切の臨書でした。

五鳳先生が重きを置いて指導されたのが線についてでした。紙に食い込む力強い線、妙味ある線など多様な線を表現できる高度な技術を身に付けることが求められました。それと「間」についてでした。「間」は意味あるもので単なる余白ではなく、見る人に何かを語りかけるこの「間」こそが書美に大きく関わつてくることを教え込まれました。

書芸術は知性と感性の融合したものです。

両者がバランス良く表現できた時、清らで格調高い書が生まれます。筆は言うことをなかなか書きいてくれません。しかし思ひもよらず面白い味を出してくれることがあります。

「間」もその時々の心情でさまざまな変化をもたらしてくれます。

いつでしたが、ある人からこのようなことを言わされました。「何と書いてあるのか読めない。作風の好き不好きは判断できるが読めると一層興味が持てるのだが」と。

今の社会で変体仮名や草書が使われるることは稀で読める人は限られます。読めないと言うこの言葉を聞き捨てる事もできます。

書美については、好きかそうでないか、感動するかしないかで理屈はいらないと思います。

現代に生きる万人の心に心地よい響きを与える書はどのような世界なのか。

伝統美を踏まえながら、また新しい書美の世界を模索するのも遺り甲斐のある道と考えます。

巡回展めぐり —その21—

(神戸会場)

日展神戸展に寄せて

第一科日本画 会員 西 田 真 人



私が初入選した一九九〇年頃の巡回展は京都、名古屋、大阪など毎年行う開催地を含め約十ヶ所で開催されていました。現在では、四、五ヶ所での開催となります。改組しながら一一五年続いている日展ですが巡回展の減少は美術界の多様化など社会状況の大きな変化が反映しているのでしょう。

そんな流れの中、毎年開催していた大阪市立美術館が改修工事に入り三年間使用が不可能となりました。そこで浮上したのが五十四年ぶりの神戸での開催です。

会場の美術館は、神戸市の海上に埋め立てて造られた人工の島、六甲アイランドにある神戸ゆかりの美術館と神戸ファツション美術館でした。この島には小磯記念美術館、芸術系コースのある六甲アイランド高校などもあり、島内の至る所に神戸市主催の野外彫刻コンクールで買上げた彫刻などが四十体ほど設置されています。ファツション美術館三階にある図書館は国内外のファツション、美術など四万冊の蔵書があり自由に閲覧できます。一日アートに浸れる六甲アートランドとも言える場所での日展開催でした。



またコロナ禍で三年間中止の懇親会が神戸では美術館隣のホテルにて久々に開催され、出品者にすれば色々と新鮮な日展神戸展となりました。

海鳥を横目に潮風を感じながらの港町神戸らしい展覧会場でした。会場は二つの美術館とは言えもともと一つの施設として建設されたモダンな美術館。そこでの展示は、従来の大坂展で見てきた印象とは異なり、出品者にとつても新鮮でした。六甲ライナーの駅構内は日展のポスターで真っ赤となり、会場近辺の遊歩道一キロほどは日展の真っ赤なバナーが並びます。この赤いバナーは今も掲げられており二〇二五年まではあります。日展会期中に全科の地元作家でワークショップを開催し市民との交歓も計り、日展会場近辺の賑わい創出に積極的に協力しました。

現代美術一辺倒になりがちな自治体などの催しに公募展の「日展」が街の活性化、魅力化に貢献する成功例となり他府県でも開催要請の声が高まればと思います。この日展神戸展を盛況な催として継続してゆくにはもう一人増の入館者が必要です。来年二〇二四年神戸展ではさらなる入館者増となりますよう知の方々にお声がけをお願いする次第です。



刊行物のご案内

第10回日展作品集

○定価 三、四〇〇円（税込）

○令和5年11月3日発行予定

○五部門の全会員・審査員・受賞者

者の作品図版

○別冊 作家本人による作品解説、釈文（書）

○諸資料

○A4判変型

○オールカラー 約二六〇頁

○表紙 福田千恵・佐藤 哲・宮瀬富之・奥田小由女・星 弘道（出品作・予定）

○出品作・予定

第10回日展図録

（五部門五分冊）

○定価 各三、四〇〇円（税込）

○令和5年11月8日発行予定

○東京会場の全陳列作品図版・目録を収録

（作家名・作品題名の読み仮名付）
○全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記

○審査所感、授賞理由ほか諸資料
○A4判変型

第一科『日展の日本画』

オールカラー 約六五頁
表紙 福田千恵（出品作・予定）

第二科『日展の洋画』

オールカラー 約一四〇頁
表紙 佐藤 哲（出品作・予定）

第三科『日展の彫刻』

オールカラー 約六〇頁
表紙 宮瀬富之（出品作・予定）

第四科『日展の工芸美術』

オールカラー 約一二〇頁
表紙 奥田小由女（出品作・予定）

第五科『日展の書』

全会員・審査員・篆刻はカラ―、

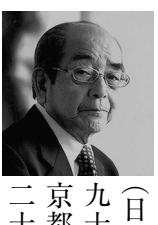
準会員・無鑑査・特選・一般入選はモノクロ 約二二〇頁

表紙 星 弘道（出品作・予定）

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

澤野 慎平先生（日本画・貪）5・6・29
横山 豊介先生（彫刻・会員）5・7・1
伊藤 裕司先生（工芸術・彫）5・7・6
(日本芸術院会員)
九十二歳。昭和五年
京都市生まれ。昭和二十八年第九回日展初入選。同四十八年日展会員、平成九年日展評議員、同十六年日展理事、同十八年旭日中綬章受章、同二十三年日展参事、日本芸術院会員、同二十四年日展顧問。昭和四十七年第四回日展審査員（以降合計五回）。



吉村 年代先生（日本画・貪）5・7・7
浅見 嘉正先生（洋画・會）5・8・16
日比野光鳳先生（書・顧問）5・8・23
(日本芸術院会員)
九十四歳。昭和三年
京都市生まれ。昭和四十二年第十回日展初入選。同五十九年日展会員、平成四年日展評議員、同十一年日展理事、同十六年日展常務理事、同廿一年日展顧問、日本芸術院会員、同二十二年文化功労者、令和三年旭日中綬章受章。昭和五十八年第十五回日展審査員（以降合計九回）。池山 阿有先生（洋画・會）5・9・9

今夏は、全国的に記録的な猛暑となり、また台風や大雨による自然災害も多く、新型コロナウイルスの五類移行後も気の抜けない状況が続いています。

今号は特別寄稿として二名の方に日展に対する思いをそれぞれの視点から述べていただきました。また「巡回展巡り」シリーズを復活し、神戸会場の取り組みと今後の課題を掲載しました。会場近辺の部門から書の線や間についての貴重な考えを語っていただきました。

「作家人生—私の仕事—」では書の各科三名ずつ、鑑査に臨む姿勢、制作において重視している点などを書いていただきました。

初回日展の審査員が決まり、初めて審査員を務める方を含めて各科三名ずつ、鑑査に臨む姿勢、制作において重視している点などを書いていただきました。

秋の日展が近づいてきました。十回展として節目の年です。日展のさらなる発展を祈念いたします。（上原）

編集委員

亀山 祐介

西田 真人

浅見 文紀

前原 喜好

歳森

野原 昌代

堀内 秀雄

利丸 好謙

村田

幽石

芳樹

福光

好謙

秀雄

利丸

村田

好謙

秀雄

利丸